

富士吉田市の文化財内訳 (令和2年3月31日現在)

| 種別 | 国 | 県 | 市 | 計(件) | |
|-------|-----------|----|----|------|----|
| 有形文化財 | 建造物 | 6 | 1 | 6 | 13 |
| | 絵画 | - | - | 10 | 10 |
| | 彫刻 | - | 2 | 1 | 3 |
| | 工芸品 | 1 | 2 | 6 | 9 |
| | 書籍・典籍・古文書 | 1 | - | 4 | 5 |
| | 考古資料 | - | 2 | - | 2 |
| | 登録有形 | 4 | - | - | 4 |
| 民俗文化財 | 有形 | - | 2 | - | 2 |
| | 無形 | 1 | 2 | 8 | 11 |
| 記念物 | 史跡 | 1 | - | 3 | 4 |
| | 名勝 | 1 | - | 1 | 2 |
| | 天然記念物 | 4 | 1 | 17 | 22 |
| 計(件) | 19 | 12 | 56 | 87 | |

※指定手続き中の文化財を含む

■富士吉田市の文化財紹介ホームページ
(富士吉田市教育委員会⇒歴史文化課⇒富士吉田市の文化財)
<https://web.fujinet.ed.jp/>

※文化財を保護するためのさまざまな取り組みに加えて、将来にわたって文化財のさらなる保存と活用を進めていくための計画が策定されています。

■山梨県及び富士吉田市の文化財に関わる計画
「富士吉田市文化財保存活用地域計画」平成31年(2019)4月 富士吉田市
「山梨県文化財保存活用大綱」令和2年(2020)3月 山梨県教育委員会

ご案内

開館時間 / 午前9:30~午後5:00 (午後4:30迄入館可)
休館日 / 火曜日(祝日を除く)、年末年始
観覧料 / ◎御師旧外川家住宅との共通入館券:
大 人400円(団体320円)
小中高生200円(団体160円)
◎富士山レーダードーム館・御師旧外川家住宅との共通入館券:大 人800円(団体600円)
小中高生450円(団体350円)
交通案内 / ●中央自動車道河口湖ICより車で15分
●東富士五湖道路山中湖ICより車で10分
●富士急行線富士山駅より山中湖方面バス15分「サンパークふじ」下車
駐車場 / 新駐車場:普通車90台、バス9台、障がい者2台
第1駐車場:普通車11台、バス3台、障がい者1台



博物館付属施設
御師 旧外川家住宅のご案内
〒403-0005
山梨県富士吉田市上吉田3丁目14-8
TEL 0555-22-1101
観覧料 / 大 人 100円(団体80円)
小中高生50円(団体40円)
※ふじさんミュージアムのチケットで入館できます。

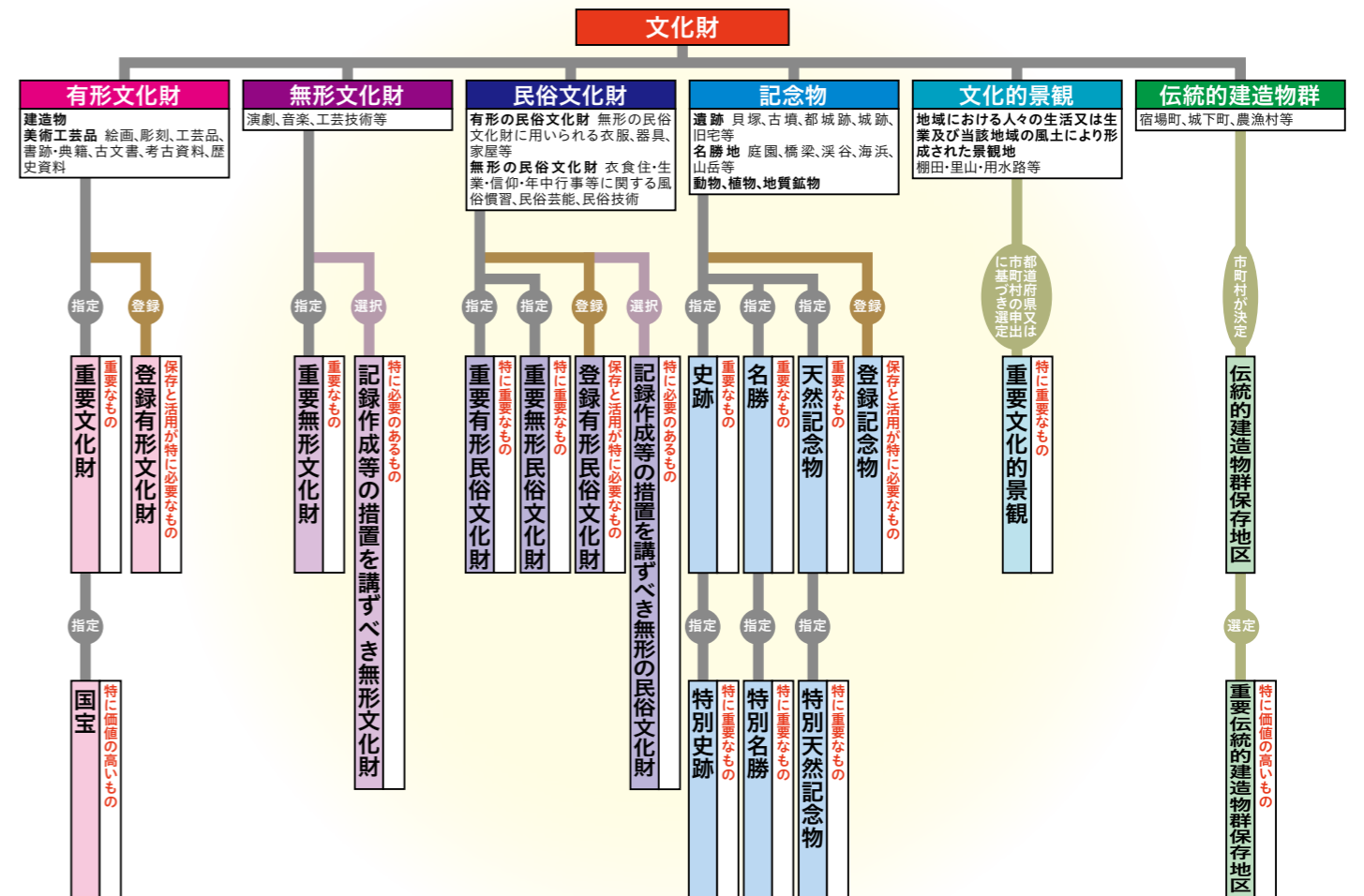
タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとされています。

Contents

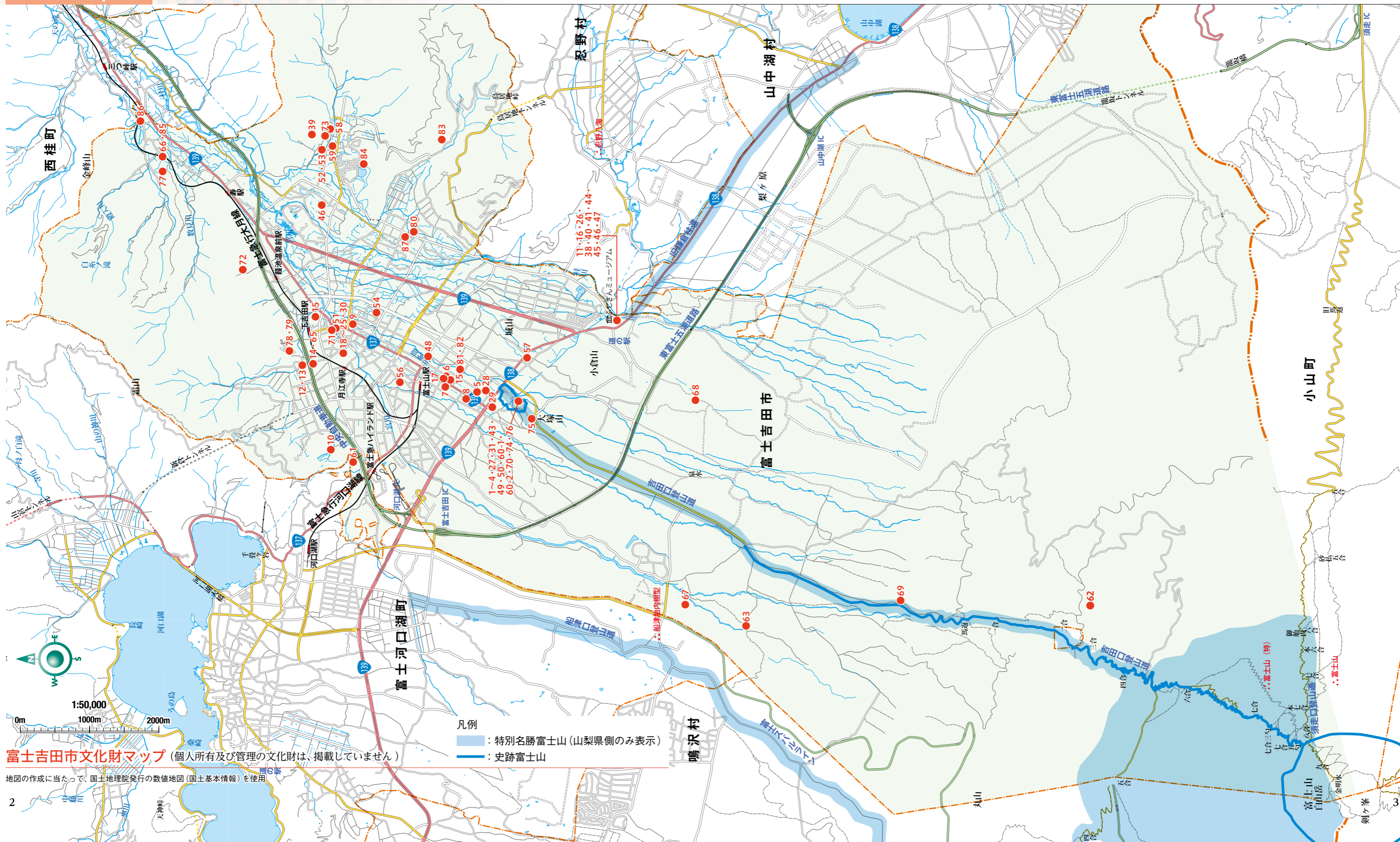
・ふじよしだのたからもの 1-16

ふじよしだのたからもの ~富士吉田市の文化財~

富士吉田市には数多くの文化財があります。ひとくちに文化財といっても、その種類はさまざまです。建造物や工芸品などが生み出してきたもの、また名勝や動植物といった自然が生み出したものなどがあります。なかでも特に貴重であり、地域に欠かせないものは「指定文化財」として大切に守られています。富士吉田市でも多くの文化財が指定物件となっています。(詳細は巻末参照)



■文化財の体系図(文化庁ホームページ「文化財の体系図」を参考に作成)



富士吉田市文化財マップ (個人所有及び管理の文化財は、掲載していません)

地図の作成に当たって、国土地理院発行の数値地図(国土基本情報)を使用

凡例

- 国：国指定文化財
- 市：市指定文化財
- 登：登録有形文化財
- 世：世界遺産構成資産
- 県：県指定文化財

有形文化財

建造物

●北口本宮富士浅間神社 国 世

■所在地：富士吉田市上吉田5558

■所有者：北口本宮富士浅間神社

【1】本殿 国



■指定年月日：昭和28年3月31日

元和元年(1615)都留郡の領主鳥居土佐守成次によって建立された。桁行一間、梁間二間の入母屋造りの建物を身舎とし、その前面に唐破風造りの向拝一間をつける。桃山時代の装飾的技法とともに、漆塗に彫刻、鍍金々具を用いた豪華富麗な意匠が表現されている。

富麗：豊かで美しいこと。

【2】東宮本殿 国



■指定年月日：明治40年8月28日

本社本殿の東に位置し、北東に面して建つ。富士権現とも呼ばれてきた。行一間、梁間一間の身舎の前面に一間の向拝を付けた一間社流造の形式である。貞応2年(1223)北条義時が浅間本社として創建したと伝えられる。現在の社殿は永禄4年(1561)武田信玄が川中島の戦いの戦勝を祈願して、浅間本社として新たに造営したものである。また、元文元年(1736)に内陣に納められた棟札から享保20年(1735)に村上光清が修復をおこなったことがわかる。桁北口本宮富士浅間神社の境内にあって現存する最古の社殿である。

【3】西宮本殿 国



■指定年月日：昭和28年3月31日

本社本殿の西に北面して建つ。現在の社殿は、文禄3年(1594)都留郡の領主浅野左衛門佐氏重が本社として建立したものである。桁行一間、梁間二間の身舎の前面に一間の向拝をつけた一間社流造りの形式となっている。唐草文の彫刻や飾金具など、その装飾意匠は、桃山時代の特色をよく表現している。

【4】北口本宮富士浅間神社 (建造物群) 国 世

■指定年月日：平成29年11月28日

(-1) 拝殿及び幣殿 国



■附 灯籠1基

本殿の前面に付属する建造物として、元和元年(1615)に鳥居成次によって本殿とともに造営された。慶安2年(1649)には秋元富朝によって本殿とともに修復が加えられ、元文4年(1739)に村上光清を中心とした富士講中によって造営されたのが、現在の社殿となる。正面中央に構える大きな唐破風造の向拝を彫刻や彩色、鍍金具により飾り、参詣者のための壮麗な礼拝空間を創っている。

(-2) 惠毘壽社及び透塀 国



惠毘壽社は本殿の裏手にあり、惠毘壽(事代主神)と大黒天(大国主神)の神像を祀ります。惠毘壽社の両側からは透塀が延び、幣殿へと接続している。塀は墨書から宝暦3年(1753)の造営とわかり、惠毘壽社は同時期かやや下の頃の造営とみられる。

(-3) 神楽殿 国



本殿の正面に位置し、拝殿に正対し、南東に面して建つ。祭礼時に太々神楽が奉納される舞台である。規模は方一間で、柱間寸法は6.2mと広く、高い位置に床を張り、四面を開放する作りとなっている。元文元年(1737)に村上光清を中心とした富士講中による境内建物大修理の一環で諏訪神社や福地八幡社と同時期に建立されたものである。富士山御師により継承されてきた太々神楽が奉納される舞台であり、現在でも神社の祭礼には地元の神楽講により太々神楽が奉納されている。

(-4) 手水舎 国



■附 棟札一枚

延享2年(1745)に建立。本殿、東宮、西宮と並ぶ彫刻類の多さや、富士山の溶岩から削り出された巨大な水盤石と四本の柱など、村上光清らによる大修理に相応しい作りである。水盤石に立つ青銅の龍の口からは、富士信仰の霊場である富士八海の一つ、泉水から引き込んだ霊水が、現在も絶え間なく溢れ出ている。

(-5) 社務所 国



■附 棟札一枚

拝殿の東方に位置する切妻造、平入の建物で、北西に面して建つ。文献では「斎浄所」、「清浄所」、「御供所」等とあり、時代によって区々の呼称が用いられていた。建立年代は御供所の棟札に寛保元年(1741)の修復とあるが、この時に再建されたものと考えられている。唐破風の玄関が神社建築らしさを表すことを除いて、素朴な建物である。一部改造はあるが、間取りは市内に所在する御師住宅と類似しており、この流れの建物と考えられ、村上光清の中興による建造物群のうち現在まで残る唯一の住宅建築として高く評価されている。

(-6) 随神門 国



■附 棟札一枚

元文元年(1736)の建立。永正17年(1520)の銘のある随神像が存在することなどから、村上光清らにより新たに再建されたものであることがわかる。彫刻意匠が多く装飾性に富んだ建物で、屋根裏天井により演出される広がりのある空間と太い柱は参詣者に豪壮な雰囲気を与え、当社の入口を飾るに相応しい門である。

(-7) 福地八幡社 国



■附 棟札二枚

大鳥居の南東脇に位置する、一間社流造の社殿である。貞享元年(1684)の棟札には村の氏社であったものを神社境内に再興したとある。元文5年(1740)に村上光清らが一連の大修理により修繕をおこない、その規模や構造の類似から東宮本殿をモデルとしたようである。また、身舎の木鼻などは貞享期の特徴を持ち、古材も再使用したと考えられる。村上光清の中興による建造物群のなかであって、各時代の建造物が伝わる境内の重層性が現れた建物として高く評価されている。

(-8) 諏訪神社拝殿 国



本殿は昭和2年に焼失し、同51年に再建された。本殿は元文元年(1736)に村上光清らにより建立されたとの棟札があるが、拝殿については明確な記録がない。ただし、建築様式は元文期前後のものであり、村上光清の大修理時における建立と考えられる。なお、諏訪神社は浅間神社創建以前からこの地に祀られていた歴史がある。

【5】小佐野家住宅主屋・蔵 国 世



■指定年月日：昭和51年5月20日

■附 家相図一枚

■所在地：富士吉田市上吉田7-11-1

■所有者：個人

代々富士山の御師を勤めてきた家で、この住宅は、文久元年(1861)頃に再建され、富士講最盛期における平面構成を現在に伝える貴重な建物である。主屋は一部二階切妻造り、座敷部の前面に台所部を、背面に神殿部を接続した形式である。

※個人住宅につき非公開。

ふじさんミュージアムのエリア内に模造復元住宅がある。

【6】旧外川家住宅 国 世



■指定年月日：平成23年6月20日

■附 物置一枚・家作萬覚帳一冊・家相図一枚

■所在地：富士吉田市上吉田3-14-8

■所有者：富士吉田市

明和5年(1768)に建築された主屋は保存状態が良好で、当初部材の大半が残されている。離座敷は江戸時代後期の建築で、主屋にあった御神前や宿泊機能に移して一体化させ、主屋から独立させたものである。旧外川家住宅は御師家の生活の変遷を知る上で貴重な指標となる建造物である。

【7】上文司家住宅 主屋 登



■指定年月日：平成29年10月27日

■所在地：富士吉田市上吉田

■所有者：個人

上文司家は上吉田の町が成立した元亀3年(1572)から続く家筋である。敷地は縦に細長く、本通りからタツミチとよぶ通路に入り、長屋門をくぐると主屋がある。主屋には横方向に5室が並び、富士講を迎える客間となっていた。このうちの1室が祭神を祀る御神前となっている。主屋は幕末から明治初期の建築と推定される。

※個人住宅につき非公開。

【8】原家住宅 主屋 登



■指定年月日：平成29年10月27日

■所在地：富士吉田市上吉田

■所有者：個人

原家は上吉田の御師の家で、屋号は「竹谷」といい、元亀3年(1572)から続く家筋である。敷地は縦に細長く、本通りからタツミチとよぶ通路に入り、中門をくぐると主屋がある。主屋の左手には式台をもつ玄関、右手にはナカノクチと呼ばれる入口がある。奥にある渡り廊下を進むと富士山の祭神を祀る御神前がある。

【9】高尾家住宅 主屋 (絹屋町織物市場) 登



■指定年月日：平成29年10月27日

■所在地：富士吉田市下吉田

■所有者：個人

高尾家住宅は、織物の市が開かれた下吉田の絹屋町にあります。高尾家は問屋を営んでおり、糸を仕入れ、織賃を払って機屋に布を織らせ、それを大阪や東京の問屋に販売していました。住宅は住居部分と店舗部分に分かれ、住居部分は1925年に建てられ、1938年に店舗部分を増築したといわれています。

※個人住宅につき非公開。

【10】鹿留発電所うそぶき放水路
吐口部



■指定年月日：平成9年1月5日
■所在地：富士吉田市旭5-2457-1、5-2462-1、5-4636-1
■所有者：東京電力株式会社
河口湖の水を宮川へと導き、下流で発電の用に供するための水路。斜面の中腹に石造の坑口を設け、斜面を開渠で流下させる構成である。呑口部と同様に石積み構法等に時代の特徴が現れており、また年月を経て周囲の景観に溶け込んでいる。

【11】旧宮下家住宅



■指定年月日：昭和58年12月7日
■所在地：ふじさんミュージアム
■所有者：富士吉田市
旧所在地は市内小明見で、平成2年にふじさんミュージアムに移築復原。面積は約36坪(118.8㎡)、木造平屋建、茅葺入母屋造の民家で、建築年代は、間取りの形式や外回りの閉鎖的な構え、低く密に立つ柱の配置、梁組と構法などから18世紀初頭か、それをやや遡るころと推定されている。この地域における江戸時代中期の民家を知る上で重要な建物ある。

【12】正福寺の本堂



■指定年月日：昭和41年11月1日
■所在地：富士吉田市浅間1-5-38
■所有者：正福寺
当寺は、大同年間(806~810)に創建されたと伝わる。難波の大工を棟梁として招き、6年の歳月を費やし元和6年(1620)に完成。その後、享保6年(1721)に改修。規模は十間四面で、千鳥破風入母屋造の堂々たる寺院建築である。

【13】正福寺の経堂・八角輪転蔵



■指定年月日：昭和41年11月1日
■所在地：浅間1-5-38
■所有者：正福寺
経堂は、明和年間(1764~72)、第20代住職圓識の代に建立。四間四面の土蔵造りで、昭和56年に修復されている。内部には寛政6年(1794)作の華麗な八角輪転蔵(回転するお経を納める八面のたんす)が備わる。八角輪転蔵の中央には阿弥陀三尊を安置し、中には鉄眼の一切経、黄檗慈経五千七百巻を納めている。

【14】大正寺の鐘楼



■指定年月日：昭和41年11月1日
■所在地：富士吉田市浅間1-2-1
■所有者：大正寺
文化10年(1813)に第12代住職正観が建立したもので、規模は正面7.65m、奥行7.1m、高さ9.5m。基礎は新倉産の石で積み上げられ、豪壮な外観からしても、当時の建築様式の粋を集めたものといえる。窓は木連格子、屋根は千鳥破風入母屋造で、内部には「大正寺常付物積正欽」の梵鐘が吊られている。

【15】福源寺の太子堂



■指定年月日：昭和41年11月1日
■所在地：富士吉田市下吉田3-41-18
■所有者：福源寺
享保10年(1725)に中興の住職仙が現在地に寺基を移転した際、現存の本堂、山門と共に造立された。六角の寄棟で屋根は銅板葺、廻廊付で擬宝珠が高欄に付く。また、天井には、雲龍図が描かれ、「狩野川幸山富老信苧六十一歳書画」と銘がある。堂内には明和4年(1769)刊行「親鸞聖人御旧跡二十四輩参詣記」には親鸞聖人の作とも記されている。木造聖徳太子立像(孝養像)が安置されている。

【16】旧武藤家住宅



■指定年月日：昭和58年12月7日
■所在地：ふじさんミュージアム
■所有者：富士吉田市
旧所在地は下吉田の東町で、現在はふじさんミュージアムに移築復原されている。寛文から延宝(1661~81)の頃の建築と推定される。建坪は約47坪です。幕末期に大きな改造があり、閉鎖的であった開口部を開放的な建具とし、屋根は養蚕を行うために兜造りに改造されたものである。また土間下手には馬屋が増築されている。

【17】浅間坊表門



■指定年月日：平成27年2月24日
■所在地：富士吉田市上吉田4-1-22
■所有者：富士吉田市
この表門は、豪華な造りで、斗拱・蟄股や虹梁・大瓶束の妻飾りなど社寺の様式をもつ。また、妻側に「丸不二」の紋が裝飾され、東京や千葉で隆盛した「丸不二講」が表門建立時に多大な貢献をしたことが分かり、御師と富士講との深い結びつきを示す。木札から、寛政8~9年(1796~1797年)ころの建立とわかる。平成28年3月に保存修理完了。

絵画
【18】絹本着色 絶学祖能像



■指定年月日：平成22年2月25日
■所在地：富士吉田市下吉田3-26-18
■所有者：月江寺
応永2年(1395)に臨済宗向嶽寺派として富士吉田に月江寺を開いた禅僧・絶学祖能(1354-1428)の頂相(肖像画)です。椅子に腰掛け、右手に払子を持つ典型的な頂相で、没後すぐ制作されたと考えられる。保存状態がよく、垂れた目や肉の落ちた頬、華奢な肩、血管の浮き出る手の甲など真に迫る描写が故人をしのばせる。

【19】絹本着色 無本覚心像



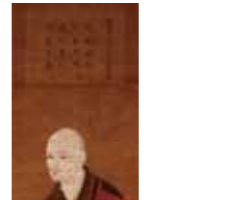
■指定年月日：平成22年2月25日
■所在地：富士吉田市下吉田3-26-18
■所有者：月江寺
鎌倉中期の禅僧、無本覚心・別称法燈国師(1207-1298)の頂相(肖像画)です。絶学祖能が法孫にあたる。大きな頭で顎が細く、目鼻の重心が低い特徴的な顔で描かれる。月江寺草創期に揃えられた室町時代の作品と思われる。

【20】絹本着色 孤峰覚明像



■指定年月日：平成22年2月25日
■所在地：富士吉田市下吉田3-26-18
■所有者：月江寺
鎌倉後期の臨済宗の高僧、孤峰覚明・別称三光国師(1271-1361)の頂相(肖像画)。孫弟子が絶学祖能となる。画面劣化による補筆もされているが、椅子に腰掛け、右手に払子を持つ典型的な頂相で、月江寺草創期に揃えられた室町時代の作品と思われる。

【21】紙本着色 峻翁令山像



■指定年月日：平成22年2月25日
■所在地：富士吉田市下吉田3-26-18
■所有者：月江寺
峻翁令山(1342-1408)は月江寺の開祖である絶学祖能と同様に抜隊得勝に学び、塩山の向嶽寺の住職を5回務めた鎌倉末から室町時代の禅僧。画面に半身を大きく描き月江寺所蔵の他の僧の頂相(肖像画)とは形式が異なる。筆使いもやや粗く、他のものに比べ時代が下ると思われるが、室町時代の制作である。

【22】絹本着色 抜隊得勝像贊文



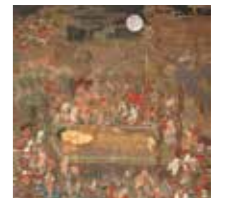
■指定年月日：平成22年2月25日
■所在地：富士吉田市下吉田3-26-18
■所有者：月江寺
抜隊得勝・別称大円禅師は月江寺の開祖・絶学祖能の師で、塩山の臨済宗寺院・向嶽寺を開いた禅僧。本来は下部に抜隊得勝の肖像画があり、頂相としての形式を整えられていたと思われるが、現在は贊文のみ残存している。他の頂相と同様に月江寺草創期に揃えられたと思われる。室町時代の制作とみられる。

【23】絹本着色 禅心聖悦像



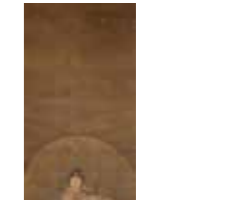
■指定年月日：平成22年2月25日
■所在地：富士吉田市下吉田3-26-18
■所有者：月江寺
月江寺中興開山である禅心聖悦(-1648)の頂相(肖像画)。禅心は住職であった寛永20年(1643)に寺を向嶽寺派から当時隆盛していた妙心寺派に転派し寺の興隆に尽くした。没後すぐに描かれ、贊文は明治に入って妙心寺521世が記した。江戸初期の制作で、丁寧で的確な描写に人物の誠実さまでにじみ出るような滋味がある。

【24】絹本着色 仏涅槃図



■指定年月日：平成22年2月25日
■所在地：富士吉田市下吉田3-26-18
■所有者：月江寺
寝台に横たわる釈迦を囲んで周りで弟子や仏菩薩、動物が嘆き悲しみ、釈迦が亡くなる瞬間の様子を描いたものである。月江寺で釈迦の命日の2月15日に行われる涅槃会の法要の本尊とする。金箔を切って貼った切金が見られ、人物表現も古様で、山梨県内では最古級の室町初期の制作と思われる。

【25】絹本着色 蛤蜊観音図



■指定年月日：平成22年2月25日
■所在地：富士吉田市下吉田3-26-18
■所有者：月江寺
波間にゆれるハマグリの中から現れた観音菩薩を描いた絵画。蛤蜊観音は禅宗で好まれる変化観音の一種だが、白衣観音や楊柳観音に比べて絵画で表現されるのは数少ない。落ち着いた色彩・柔らかな筆使いで、観音の衣の裾は貝の身と同化するように表現される。室町時代の制作。

【26】渡辺雪峰日本画下絵 市



■指定年月日：昭和62年6月1日
■所在地：ふじさんミュージアム
■所有者：個人

本名を精次といい、父の任地であった山形県で明治元年に出生し、明治6年郷里である本市に戻る。裕福な環境に育ち、師について画、書道、漢詩を学んだ。明治35年(1902)頃上京、日本文人画協会を主宰するなど、日本画家として本格的な活動を始める。昭和20年、戦火を避けて本市に戻り、昭和24年にその生涯を終えた。

【27】北口本宮富士浅間神社本殿絵馬五面 市



■指定年月日：平成14年11月29日
■附 絹本着色 富士山北面図
■所在地：富士吉田市上吉田5558
■所有者：北口本宮富士浅間神社

○板絵著色椿に菊図 2面

縦121.7cm、横121.7cm。元和4年(1618)に鳥居土佐守が寄進した。

○板絵著色師馬図・松猿図 2面

縦120.5cm、横185.5cm。狩野常信筆。元禄元年(1688)に秋元但馬守が寄進した。

○板絵金地著色神馬図 1面

縦105.3cm、横136.8cm。狩野洞元那信筆。元禄11年(1698)に戸田能登守忠真が寄進した。

○絹本着色富士山北面図 1幅

縦52.9cm、横112.9cm。法眼永真筆。寛文12年(1672)に寄進されたもの。寄進者は不明だが、秋元氏によるものと考えられる。

彫刻

【28】木造釈迦如来立像 県



■指定年月日：昭和39年11月19日
■所在地：富士吉田市上吉田7-7-1
■所有者：西念寺

西念寺は行基の開創と伝わる古寺。本像は、富士山一合五勺にあった西念寺塔頭の定禅院の本尊であったとされる。本像の構造は、内刻りのある桧材の寄木造で、玉眼を嵌入、眉間の白毫は金属製で、像高は80cmを測る。現在は宝珠を持ち、薬師如来の印相を結ぶが、手や持物は後に改変されたもので、造立当初は釈迦像であった。縄状に巻いた頭髪、通肩にまとい頸を中心とした同心円状の衣文を表す衣、三段にまとめた裾など清凉寺式釈迦像の特色を備えている。

【29】銅造如来形立像 県



■指定年月日：平成5年11月29日
■附 延享四年状1通
■所在地：富士吉田市上吉田38
■所有者：上行寺

本像は、銅製で台座から高さ12.8cm、像の高さ9cmの小型の金銅仏である。衣が両肩にかかり、右手を上左手を下にし、目は伏せ、鼻や唇は小さく頬はふっくらしている。これらの特徴から、8世紀初めの作と推定されている。江戸時代は、吉田口登山道五合五勺の経ヶ岳に安置されていた。

【30】木造聖観音菩薩坐像 市



■指定年月日：平成22年2月25日
■所在地：富士吉田市下吉田3-26-18
■所有者：月江寺

月江寺創建当初の本尊と推定される観音菩薩の坐像。構造は寄木造・玉眼(水晶をはめた眼)で、前後材を束でつなげ、胎内中央にも束を彫り出す技法や、流麗な衣文・面長で端麗な顔・角張った体などの作風から京都の仏師集団である院派の作品と思われる。制作は室町時代・14世紀末頃。

工芸品

【31】太刀 銘 表 備州長船経家 文安二年二月日 国



■指定年月日：大正12年3月28日
■附 糸巻太刀拵
■所在地：富士吉田市上吉田5558
■所有者：北口本宮富士浅間神社

備前には応永備前といわれる一団の刀工があり、当時活躍した名工、長船経家の作刀で、応永よりやや下った文安2年(1445)の作。この太刀は、延宝8年(1680)の富士山庚申御縁年に都留郡の領主である秋元喬知から北口本宮富士浅間神社に奉納されたものである。

【32】刀 大磨上 無銘 伝 山城国 来国真 県



■指定年月日：昭和45年12月23日
■所在地：富士吉田市
■所有者：個人

都山城国西ヶ岡の「来鍛冶」は、質実剛健の気風を製作面に反映する鍛刀術に優れ、公卿や朝廷護衛の武士に好まれ隆盛を極めた。また鎌倉幕府の御用鍛冶もつとめ、代々名工が続き、その一門は大いに繁栄した。本刀は、鎌倉時代、来国真の手になるものと伝えられ、一門を代表する重要な刀となっている。

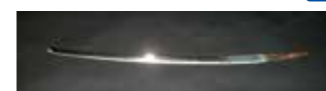
【33】太刀 生産無銘(伝舞草)「山湖丸」 市



■指定年月日：昭和56年4月28日
■所在地：富士吉田市
■所有者：個人

「舞草鍛冶」の技法を伝えるもので、「舞草の太刀」といわれている。岩手県一関を中心に住んでいた太刀鍛冶の作で、その技法は古く、既に平安時代の承平年間(931~938)に見出すことができる。本太刀のように健全な姿を残しているものは稀であり、学術資料、歴史資料としても貴重である。

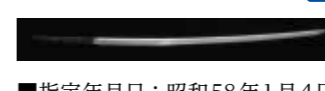
【34】刀 朱銘 磨上 備前国長船長光 市



■指定年月日：昭和56年4月28日
■所在地：富士吉田市
■所有者：個人

備前長船といえば名刀の代名詞であるが、本刀は、備前国(岡山県)長船に住み、鍛刀を続けた刀匠達の中でも特に秀でた一人、長光の作である。作風は優美で、長船鍛冶の基本的姿を留め、後代本流を占めるに至った。朱銘のある健全なものは、現在その数も少なく、歴史的、学術的に重要な名刀である。

【35】太刀 大磨上無銘(伝尻懸) 市



■指定年月日：昭和58年1月4日
■所在地：富士吉田市
■所有者：個人

尻懸(尻掛)とは、奈良東大寺裏側の地名で、尻懸派の祖、則広が和葛原城山麓から建治年間(1275~78)に移住したところから尻懸派とよばれ、寺院のお抱え鍛冶から鍛刀となった。大和五流と称される中の大きな一派である。本刀は、鎌倉末期に派を代表した名工則長作と伝えられ、革巻太刀拵は丸に十字紋の儀式用である。

【36】太刀 以軍艦三笠砲鋼秀明 市



■指定年月日：昭和58年1月4日
■所在地：富士吉田市
■所有者：個人

日露戦争の旗艦「三笠」の左後部大砲の砲鋼一部を玉鋼として用いた、海軍将官用の作刀者として名高い堀井秀明の作。昭和4年春、元海軍中将大西瀧次郎氏が長刀として鍛造させ、将官拵を付したもので、大西家の家紋がある。本刀は長刀として本造りに鍛えられたもので、一振のみ現存することも、その価値を高めている。

【37】脇指 銘 安藤重光(花押) 市



■指定年月日：昭和58年1月4日
■所在地：富士吉田市
■所有者：個人

この刀匠は甲斐国に出生し、金井卯八郎と称した。後に江戸に出て白河藩士・名匠沢原重胤の高弟となり、本安藤姓と名乗り、師重胤の重を頂き、安藤重光と改名した。この刀は、安政の頃(1854~60)の重光一期一振の傑作であって、欄間透かし彫りの技法を施した作刀は、上古より数振りのみと記録されている。

【38】不動明王像御正体 県



■指定年月日：平成27年2月5日
■所在地：ふじさんミュージアム
■所有者：富士吉田市

この不動明王像御正体(懸仏)は、昭和60年に富士山八合目で発見され、昭和61年8月1日に市指定文化財、平成27年に歴史的価値等を評価され県指定となった。中央には台座に座る8cm程の不動明王が鑄出され、そこに刻まれた銘文によると、文明14年(1482)に総州(千葉県)の木更津の源春という人物が富士山に八面奉納したうちの一面であることがわかる。

【39】万年寺の梵鐘 市



■指定年月日：昭和41年11月1日
■所在地：富士吉田市向原1-6071
■所有者：万年寺

万年寺の運営上人に深く帰依し檀家となった郡内領主秋元但馬守の家臣であった飯塚三右衛門元重が延宝8年(1680)に没し、のち正徳3年(1713)元重の追善大法要を営んだ際、元重の子である重登が、幕府お抱えの鋳物師木村将監藤原安成に命じてこの鐘を鑄造させ、翌年7月当寺に寄進したものである。

書籍・典籍・古文書

【40】紙本墨書仁王経疏卷上本 円測撰 国



■指定年月日：昭和11年5月6日
■所在地：ふじさんミュージアム
■所有者：個人

唐の玄奘三蔵の弟子円測(613~696)が仁王経に詳しい注釈を加えたもので、全六巻からなっている最初の一巻が巻上本である。仁王経は護国三部経として、また国家鎮護、災障消滅の経典として尊重され、写経生によって全国に流布された。本書は奈良時代に写経されたものである。

【41】^{まくたにっき} 菊田日記 市



■指定年月日：昭和48年10月1日
■所在地：ふじさんミュージアム
■所有者：個人

この日記の筆者は富士山御師の菊田式部広道で、享和3年(1803)10月から天保6年(1835)7月に至る33年間、村名主として、また御師として関与・見聞したことを、自己の備忘録として記録したものである。全36冊になるこの日記は、当時の上吉田村全体の動向を窺うことのできる貴重な歴史資料である。

【42】^{いちじふせつ} 一字不説の巻 市



■指定年月日：昭和62年6月1日
■所在地：富士吉田市上吉田
■所有者：個人

富士行者の食行身禄が苦しい修行の中、享保7年から14年(1722~29)の間に書き上げたもので、身禄入定の際の口説「三十一日の巻」とともに、近世富士講教典の双璧となるものである。この巻物は身禄自身によって当初12巻作られたが、現在確認できるのは、富士山本宮浅間大社と個人の所有する2巻のみとなっている。

【43】^{ふじのにっき} 富士乃日記 市



■指定年月日：昭和63年2月10日
■所在地：富士吉田市上吉田5558
■所有者：北口本宮富士浅間神社

江戸在住の京都上加茂神社の神官であり、当時江戸においても有名な国学者であった加茂季鷹が、以前から親交があった吉田御師の小猿屋国秀、国仲の父子との約束により、寛政2年(1790)当地を訪れた時の旅日記である。諏訪明神の祭礼(吉田の火祭)や富士登山など、当時の吉田のようすが克明に記録されている。

【44】^{たけやかんろう えもんにつき} 橋屋勘右衛門日記 市



■答申年月日：令和2年3月27日
■所在地：ふじさんミュージアム
■所有者：御師簡屋

御師橋屋の当主である橋屋勘右衛門が寛文7年(1667)~元禄15年(1702)に記した日記である。橋屋は御師として活動とともに医業にも精通しており、診療や調薬も積極的に行っていた。表紙には「大筒屋日記」と題箋が付されており、いずれかの時期に橋屋から簡屋に委ねられたものと考えられる。当時の御師の活動を知るうえで貴重な資料である。

考古資料

【45】^{かみなかまろ いせきまいのういこうしつどひん} 上中丸遺跡埋納遺構出土品 県



■指定年月日：平成30年3月1日
■所在地：ふじさんミュージアム
■所有者：富士吉田市

上中丸遺跡の発掘調査で発見された約4,500年前の縄文時代の資料である。注口土器に黒曜石1点と磨製石斧8点が納められ、埋めた穴の上には石で蓋がされていた。本資料と同様の埋納事例は、埼玉県小栗野町の塚越向山遺跡の出土品のみで、本資料が全国で2例目となる。両遺跡とも、使用可能な石斧と黒曜石を埋めたものであり、集落を移転する際に埋納した可能性がある。

【46】^{さいほうじ みだしじいたび} 西方寺弥勒種子板碑 県



■指定年月日：昭和62年12月2日
■附 西方寺弥勒種子板碑一基
■所在地：富士吉田市小見2058
■所有者：西方寺

西方寺の板碑は2基ある。大きい方は鎌倉時代の弘長元年(1261)に作られたもので、高さ91cm、緑泥片岩製。小さい方は、高さ43.5cmの玢岩製で、延文6年(1361)の銘がある。2基とも、市内向原地区の東方にある西方寺旧地の土中に埋もれてものが、大正12年(1923)の関東大震災の土砂崩れによって発見された。

民俗文化財

有形民俗文化財

【47】^{じきぎほ みろく かみぬき} 食行身禄の御身抜及び 県
^{まとい のほろ} 行衣・野袴



■指定年月日：昭和36年12月7日
■所在地：ふじさんミュージアム
■所有者：富士吉田市

食行身禄は、寛文11年(1671)伊勢国に生まれ、17歳で富士行者になった。享保18年(1733)に、人々の苦しみを救うことを目的に富士山北口七合目の烏帽子岩において、断食修行31日の後入滅した。御身抜は食行身禄の信仰を表現した文言を記したもので、行衣・野袴は、身禄が富士登拝の際に着用したものである。

【48】^{あいぞめしりょう} 藍染資料 県



■指定年月日：昭和39年2月20日
■所在地：富士吉田市上吉田
■所有者：個人

江戸中期から木綿が普及し藍染めが発達するにつれ、専門の紺屋が出現し隆盛を極めた。近代になり、化学染料の普及で天然藍が消滅に近い状態の中、当時の工場、用具の他、藍甕41個、藍玉3俵、型紙638枚、掛軸2幅、看板2枚、染物組合問屋の印1個、関係古文書1冊と、多くの貴重な資料が保存されている。

無形民俗文化財

【49】^{よしだ ひまつ} 吉田の火祭 国



■指定年月日：平成24年3月8日
■所在地：富士吉田市上吉田
■保持団体：吉田の火祭保存会

吉田の火祭は、上吉田の北口本宮富士浅間神社とその摂社である諏訪神社の祭礼で、毎年8月26、27日に行われる。7月1日の富士山の山開きに対し、夏山登山の終わりを告げる祭りである。元々は上吉田村の氏神であった諏訪神社の例祭であったが、富士信仰が盛んになるにつれて、浅間神社の社域が拡大して諏訪神社を取り込み、現在は両社の祭礼として実施されている。「鎮火大祭」という。

26日には、諏訪神社の明神神輿と御山さん(御影)と呼ばれる富士山をかたどった御山神輿が御旅所まで巡行する。神輿が御旅所に入ると、通りに大松明が立てられ、世話人によって次々と点火される。一方、沿道の家々でも井桁松明に火を灯し、富士山の山小屋でも篝火が焚かれ、山と町とが一体となつての火祭となる。翌日の27日は、御旅所を出立した2基の神輿が地区内を巡ります。そして諏訪神社の故地とされる御鞍石を經由して神社へ還御し、境内の高天原を巡る。神輿の後には、スキの玉串を手にした人たちが続き、2基の神輿と一体となって高天原を巡る。

【50】^{きたくちほんぐう ふじせんげんじんじや} 北口本宮富士浅間神社 県
^{だいだいかぐら} 太々神楽



■指定年月日：平成4年6月22日
■所在地：富士吉田市上吉田5558
■保持団体：北口本宮富士浅間神社神楽講

「太々神楽」は、古くは富士山御師によって継承されてきたが、明治中期、地元崇敬者で組織する神楽講に受け継がれた。内容は、榊の舞、神巫の舞、四方拝の舞、猿田彦の神の舞、鉦女の神の舞、手力男の神の舞、天照皇大神の舞、綿津美の神の舞、稻荷大神の舞、片剣の舞、両剣の舞、墓目の舞の十二座。

【51】^{しもよしだ やぶさめまつ} 下吉田の流鏝馬祭 県



■指定年月日：平成29年9月7日
■所在地：富士吉田市下吉田3-32-18
■保持団体：下吉田の流鏝馬保存会

流鏝馬は、古くは富士登山道の馬返付近のリュウガ馬場が勝山・下吉田の氏子が奉納したのが始まりとされる。流鏝馬の奉仕者には、古来より1年を通じ厳しいもの忌の掟があり、さらに9月19日の祭の前7日間は別火精進の生活をする。この流鏝馬の特徴は、馬の走った跡の跡を占人が見て町の吉凶を占うところにある。

写真：緒方一貴

【52】^{こあすみ ふじせんげんじんじや} 小見見富士浅間神社の 市
^{かぐらまい} 神楽舞



■指定年月日：昭和44年3月4日
■所在地：富士吉田市小見見
■保持団体：太々神楽舞保存会

旧小見見村の産土神である富士浅間神社に伝わり、江戸時代から「クズシ」という組立式の神楽殿を使用し舞われてきた。神楽は「祝詞」から始まり、不浄祓の舞、幣の舞、四方拝の舞、両剣の舞、宇受売の舞、鉦の舞、榎の舞、扇の舞、洗米の舞、剣の舞、日月の舞、弓の舞と、神話の岩戸開きの様子を表現する神楽である。

【53】^{こあすみ かぐらまい ししまい} 小見見の神楽舞(獅子舞) 市



■指定年月日：昭和48年10月1日
■所在地：富士吉田市小見見
■保持団体：小見見神楽舞保存会

宝暦12年(1762)に小見見地区の若者(丸組・下宿組)によって始められ、その後、文政10年(1827)に引廻しの神楽堂が両組若者によって造られ、今に受け継がれる。小見見浅間神社の4月の例大祭には、境内で舞をする。この流鏝馬の特徴は、馬の走った跡の跡を占人が見て町の吉凶を占うところにある。

【54】^{てんじんじや ししまい ぼかおひ} 天神社の獅子舞と馬鹿踊 市



■指定年月日：昭和54年11月30日
■所在地：富士吉田市下吉田
■保持団体：仲祖神楽保存会

天神社天王祭において、この神楽が神前へ奉納される。舞は、通り神楽舞、神拍子ぬのふり舞、鈴の舞、狂の舞、馬鹿踊の五種。神輿の先導をし、その道筋と祈願所の辻々を潔め、町中から全ての悪霊を追い払う。神楽の由来は、伊勢御師の手代により、「御神楽辻引之事」という秘伝の巻物と共に伝えられたとされる。

【55】^{ふじやまもとこう} 富士山元講 市



■指定年月日：昭和61年1月11日
■所在地：富士吉田市上吉田
■保持団体：富士山元講

食行身禄が入定の際、その最後を取った田辺十郎右衛門が後に先達になって結成したのが富士山元講。例年1月3日の「お境詣」、同月26日田辺家身禄堂にての法会などの活動を行う。中でも災害の有無、農事の豊凶、講中の安全等を占う「焚上げ」の法会は、講演活動として中心となる行事である。

【56】松山の獅子神楽 市



■指定年月日：平成18年8月25日
■所在地：富士吉田市松山
■保持団体：松山の獅子神楽保存会
松山の獅子神楽は、松尾神社の例大祭（4月15日に近い土曜日か日曜日）に奉納される。神輿の渡御の先導をする「道中神楽」のほか、各御旅所において「下がり破」「幣の舞」「狂いの舞」を舞います。それぞれの舞は、省略・変化させることなく、太神楽系獅子舞としての舞の形態と所作をほぼ昔どおりに保って伝承されている。

【57】新屋の獅子神楽 市



■指定年月日：平成30年4月26日
■所在地：富士吉田市新屋
■保持団体：新屋獅子神楽保存会
新屋地区に伝承されている獅子舞で、7月25日に近い土曜日（宵祭）と日曜日（本祭）の津島神社の祭礼（祇園祭）で舞われる。獅子舞には「布の舞」、「鈴の舞」、「幣の舞」の3種があり、一連の舞となっている。これらの舞は全て「後ろ方」という胴幕を操作して共に舞う人が伴い、二人立獅子舞となっている。

【58】向原上組の道祖神祭 市



■答申年月日：令和2年3月27日
■所在地：富士吉田市向原
■保持団体：向原上組道祖神世話人

【59】向原下組の道祖神祭 市



■答申年月日：令和2年3月27日
■所在地：富士吉田市向原
■保持団体：向原下組道祖神御神木保存会
向原地区で1月13日～17日の小正月の時期に執り行われる道祖神祭。向原地区の上組・下組の両地区にある道祖神で20mを越える高さの御神木が建てられる。御神木には子宝を願うホウコウ人形や厄除けのヒイチをはじめ生活雑貨等が飾り付けられる。この祭りでは、道祖神に扮した中学生が新婚の家を訪れる「オカタブチコウ」が行われる。祭りの間は、各戸を回ってお礼を配り、夜にはドンドン焼きによる大きな火が焚かれる。

記念物

史跡

【60】富士山 国

■指定年月日：平成23年2月7日
■所在地：八合目以上、富士河口湖町、富士吉田市、静岡県富士宮市、裾野市、小山市
■所有者：山梨県・静岡県
富士山信仰の核心をなす富士山八合目以上の山頂部と各社寺、及び登拝道が文化財に指定されている。

(-1) 角行の立行石



■種別：史跡「富士山」構成要素
■指定年月日：平成23年2月7日
■所在地：富士吉田市上吉田5558
■所有者：北口本宮富士浅間神社
慶長15年(1610)の冬、富士山信仰の開祖として尊崇を集めた長谷川角行が吉田の地を訪れ、富士山霊を遥拝し、酷寒の中を裸身にて、石上に爪立ちして30日の荒行をした伝承が残る石である。

(-2) 仁王門礎石



■種別：史跡「富士山」構成要素
■所在地：富士吉田市上吉田5558
■所有者：北口本宮富士浅間神社
市内の臨濟宗寺院「月江寺」が護持してきた仁王門も明治初年の神仏分離により取り払われたが、幸いにして礎石はその難を逃れ現存している。仁王門の規模は、梁間1丈8尺(約5.5m)、軒高6間

(約11m)という記録がある。神社と寺院の建物が共存していた神仏混淆時代の貴重な史跡である。

【61】新倉掘抜 市



■指定年月日：昭和41年11月1日
■所在地：富士吉田市新倉2568
■所有者：新倉掘抜保存会
新倉地区は、富士山の溶岩に覆われた水利に乏しい地であったことから、河口湖から水を新倉に引くためのトンネル工事が、住民の自普請工事として延宝から元禄の中頃(1673～97)の間に着工された。途中、何度か中断があったものの、最終的に慶応元年(1865)に完成し通水した。掘抜の延長は約3,800m。

【62】富士山遥拝所女人天上 市



■指定年月日：昭和55年10月15日
■所在地：富士吉田市字細尾野5616
■所有者(管理者)：山梨県(富士吉田市)
富士山は、明治5年(1872)まで女性の登山は二合目まで、それ以上は女人禁制の山であった。しかし、どうしても山頂を遥拝したいという女性は、二合目上の東南の地にある富士山頂と日の出を拝することのできる場所へ密かに参拝した。この場所は、当時女人禪定と呼ばれたが、後になまって女人天上と呼ばれるようになった。

【63】石屋の寝床及び石切場跡 市



■指定年月日：昭和61年2月19日
■所在地：富士吉田市上吉田字鳥居木前5598
■所有者：山梨県
享保20年から元文年間(1735～41)にかけて行われた北口本宮富士浅間神社の修復工事には、巨大な手水鉢をはじめ、御手洗川にかかる石橋、あるいは石段・石畳等、膨大な量の石材が用いられた。それら石材の採取場所は吉田胎内の南方の剣丸尾にあり、そこには石工が作業するのに寝泊りしたとされる「石屋の寝床」がある。

名勝

【64】富士山 国 世



■指定年月日：昭和27年11月22日
■所在地：富士吉田市、山中湖村、富士河口湖町、鳴沢村、忍野村
■所有者：山梨県・静岡県
富士山は、日本を代表する名山として世界的に広く知られている。基底の直径は35～40kmで、標高は約3,776mの高さに達し、典型的なコニーデ型の外観を示す。日本の最高峰というだけでなく、コニーデ型火山独特の雄大な裾野や均整のとれた山容、豊かな自然等により特別名勝に指定されている。

【65】大正寺の庭園 市



■指定年月日：昭和44年3月4日
■所在地：富士吉田市浅間1-2-1
■所有者：大正寺
大正寺第12世住職の代、文化年間(1804～18)徳川将軍家の庭師石齊により富士溶岩の自然を基礎として築いた庭園で、中国廬山にある古跡「虎溪」を型どって作ったもので、一名「虎溪の庭」ともいわれる。この築庭にあたって権威をほこる石育は、正装して床几に腰掛け、鉄扇を揮って職人や人夫を指図したと伝わる。

天然記念物

【66】山ノ神のフジ 国



■指定年月日：昭和3年1月31日
■所在地：富士吉田市上暮地2114
■所有者：山神社
上暮地山ノ神社の境内にあり、種類は各地の山野に自生する「ノダフジ」で、2本が生育している。社殿側にある株は、往時には根周り3.1mあったが台風被害にあい、その保護のためにフジ柵が整備された。もう1本の株は、社殿の北側にあるイタヤカエデに巻きついている。○開花時期は4月中旬から5月頃 見頃は5月初旬から6月。

【67】吉田胎内樹型 国 世



■指定年月日：昭和4年12月17日
■所在地：富士吉田市上吉田字剣丸尾5590
■所有者(管理者)：山梨県(富士吉田市)
吉田胎内樹型は、承平7年(937)の富士山噴火で流出した剣丸尾第1溶岩流の東縁に位置する。総数62基の樹型が分布するが、中でも代表的樹型である「本穴」が、「吉田胎内」と呼ばれ、信仰の対象とされてきた。明治25年(1892)に埼玉県入間郡宗岡(現、志木市)の富士講の先達である星野勘蔵により発見され、巡礼の場となった。

【68】雁ノ穴 国



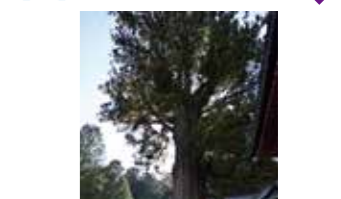
■指定年月日：昭和7年10月19日
■所在地：富士吉田市上吉田字雁ノ穴5605
■所有者：富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合
雁ノ穴は、崩れ穴および流れ穴と称する2個の溶岩洞穴と、16個の溶岩樹型群の総称である。雁ノ穴は、噴出の際に多量のガスを発散させたため、溶岩が多孔質で軽く、また井戸状の縦穴が多いなど、他の溶岩洞穴にはない特色を示す。○雁ノ穴の所在地は自衛隊の演習地内であるため毎週末の立ち入り日(おもに日曜日)以外は通常立ち入禁止。また、崩落等の危険が伴うため、注意が必要。

【69】躑躅原レンゲツツジ及びフジザクラ群落 国



■指定年月日：昭和3年3月3日
■所在地：富士吉田市上吉田字鈴原下5603
■所有者：山梨県
吉田口登山道の中ノ茶屋から大石茶屋にかけて、約33,000㎡の範囲にレンゲツツジとフジザクラの混生群落広がる。フジザクラは「マメザクラ」とも呼ぶ、富士吉田市の花になっている。○レンゲツツジの開花時期は5月下旬 見頃は5月末から6月初旬 ○フジザクラの開花時期は4月下旬 見頃は4月末から5月初旬

【70】富士浅間神社の大スギ 県



■指定年月日：昭和33年6月19日
■所在地：富士吉田市上吉田5558
■所有者：北口本宮富士浅間神社
北口本宮富士浅間神社の拝殿前向かって左側に立っており、推定樹齢は約千年。古代に神霊を招く聖域として、四隅に樹木を植えたものといわれている。同神社の神木として現存する3本のうちの1本である。本樹は、根廻り21m、幹根境の周囲12.7m、目通り幹囲8m、樹高30mで、幹は地上約10mから二支に分かれている。

【71】小室浅間神社のカツラ 市



■指定年月日：昭和44年3月4日
■所在地：富士吉田市下吉田3-32-18
■所有者：小室浅間神社

下吉田小室浅間神社の神木で、社殿の北側に生育している。幹根境の周辺13.3m、根元より9幹に分岐し、目通り幹囲は最大4.4m、枝張り東西21.9m、南北29m、樹高28.5m。樹勢は旺盛な雄株。南北朝時代、大塔宮護良親王の首級をこの樹の根元へ葬ったという伝説がある。

【72】獅子岩 市



■指定年月日：昭和61年12月1日
■所在地：富士吉田市下吉田6545
■所有者：不動尊日代御子大神社

日代御子大神社は、明治初年の神仏分離以前は不動尊または獅子岩大権現と呼ばれていた。神社の背後にある獅子岩は第三紀西桂層群にあたる桂川累層の一つで、古屋砂岩層の巨大な露出岩。古くは中央の突出した巨岩を獅子岩(王獅子岩)と呼んでいたが、今日では左側の岩を女獅子岩、右側の岩を子獅子岩と呼んでいる。

【73】向原のイチイ 市



■指定年月日：平成4年9月1日
■所在地：富士吉田市向原
■所有者：個人

民家の庭に植栽されたもので、幹の主幹部に腐朽部分認められず、樹勢は旺盛。地上1.05mで三幹に分岐し、さらにその上で再び分岐している。根元の周囲3.4m、地上1.05mの幹囲2.81m、樹高16mの雄株で、市内では最大級のイチイの巨樹である。

【74】北口本宮富士浅間神社の スギ 市



■指定年月日：平成4年9月1日
■所在地：富士吉田市上吉田5558
■所有者：北口本宮富士浅間神社

拝殿の東の裏側に立っており、「富士次郎杉」と呼ばれ市民に親しまれている。社殿の近くに立っているので生長に伴い幹がひさしに食い込んでいる。樹勢は旺盛。本樹は、露出根張り17.2m、幹根境の周囲11.8m、目通り幹囲7.8m、枝張り東5.5m、西7m、南7.4m、北9m、樹高30m。

【75】大塚丘のヒノキ 市



■指定年月日：平成4年9月1日
■所在地：富士吉田市上吉田5619
■所有者：北口本宮富士浅間神社

吉田口登山道沿いにある大塚丘は、日本武尊が東征のおり、富士山を遥拝した所と伝わる。根元の周囲4.7m、目通り幹囲3.88m、樹高22mで樹勢は旺盛。

【76】北口本宮富士浅間神社の ヒノキ 市



■指定年月日：平成4年9月1日
■所在地：富士吉田市上吉田5558
■所有者：北口本宮富士浅間神社

北口本宮富士浅間神社拝殿前、向かって右側に立つ。大きさは露出根張り17m、幹根境の周囲8.7m、幹根境までの高さ1.7m、目通り幹囲7.65m、樹高33m。2本のヒノキが根元で1本になった合着木で、地上約3mから2幹に分岐し、約12mで再び接合しているところから「富士夫婦松」とも呼ばれている。

【77】上暮地日影のカキ 市



■指定年月日：平成4年9月1日
■所在地：富士吉田市上暮地4071
■所有者：個人

白糸町日影のスギ植林地北斜向中腹に立つ。コルク層の発達は少なく、主幹は真直ぐに伸びる。目通り幹囲2.18m、樹高19m。

【78】新倉富士浅間神社のモミ 市



■指定年月日：平成6年2月1日
■所在地：富士吉田市浅間2-4-1
■所有者：富士浅間神社

新倉富士浅間神社の社殿に向かって、左側の西斜面の下部に立つ。根元の周囲5.51m、目通り幹囲4.62m、枝張りは東6.6m、西7.8m、南6.5m、北4.7mで、幹は真直ぐ伸長し、樹形は良好、樹勢は旺盛。市内では大明見山神社のモミに次ぐ巨樹である。

【79】新倉富士浅間神社のヒノキ 市



■指定年月日：平成6年2月1日
■所在地：富士吉田市浅間2-4-1
■所有者：富士浅間神社

新倉の富士浅間神社境内駐車場の中ほどに立つ。目通り幹囲3.7m、樹高25.5m。地上2.5mで南北に分岐し、分岐部には実生のスギが着生していることから「子育て神木」とも呼ばれている。

【80】大明見浅間神社のコナラ 市



■指定年月日：平成6年2月1日
■所在地：富士吉田市大明見2-148
■所有者：小室浅間神社

社殿西側に立つ。根元の周囲4.2m、目通り幹囲3.29m、枝張りは東3m、西9.6m、南3.4m、北5.5m、樹高31.5mで、幹は直幹でよく伸長している。中ほどに空洞が認められ、西方向へやや傾斜する。枝は上部でよく分岐しているが、切断されている枝が多い。また、枝にはヤドリギが寄生している。

【81】中宿山神社のエゾエノキ 市



■指定年月日：平成6年2月1日
■所在地：富士吉田市上吉田3-9-2
■所有者：山神社

路上より見るとあまり太く感じられないが、根本の周囲3.72mで目通り幹囲は3.85mを測る。樹高18m、樹勢は旺盛で、地上3mより大枝2本を含め5本に分岐している。

【82】中宿山神社のコブシ 市



■指定年月日：平成6年2月1日
■所在地：富士吉田市上吉田3-9-2
■所有者：山神社

吉田小学校北側の山神社の社殿前に向かって右側の一段低くなっている所に立つ。根元の周囲2.66m、地上1.4mの幹囲3mで、南北2幹に分岐している。南幹の幹囲2.12m、北幹の幹囲1.98m、枝張りは東9m、西2.3m、南2.5m、北8.5m、樹高18mで樹形は良好、樹勢は旺盛。

【83】大明見山神社のモミ 市



■指定年月日：平成6年6月29日
■所在地：富士吉田市大明見3499
■所有者：大明見山神社

目通り幹囲4.79m、幹には腐朽部分が認められず、樹勢は旺盛で樹形も大変素晴らしく、市内では最大級のモミの巨樹である。

【84】小明見字海端子の神社の ウワミズザクラ 市



■指定年月日：平成6年6月29日
■所在地：富士吉田市小明見5-3352
■所有者：小明見子之神社

目通り幹囲2.1m、樹高は22m、樹勢は旺盛で、地上約4mより北方向へ傾斜し、枝を路上に広げている。

【85】上暮地山神社のイタヤカエデ 市



■指定年月日：平成6年6月29日

■所在地：富士吉田市上暮地2114
■所有者：上暮地山之神社
樹高24m、目通り幹囲3.05m、主幹は地上8mくらいまでは枝が分岐せず直幹となっている。現在、県内で目通り幹囲が3m以上のイタヤカエデは、本樹以外確認されていない。

【86】上暮地浅間神社のカヤ群 市



■指定年月日：平成6年6月29日
■所在地：富士吉田市上暮地6-11-3
■所有者：上暮地浅間神社

カヤ群のなかで最大株は、目通り幹囲3m、樹高19mで、樹勢は旺盛な雄株である。市内では最大のカヤの巨樹で、その他のカヤも含め、38本が生育している。

【87】大明見の大ナシ 市



■指定年月日：平成6年6月29日
■所在地：富士吉田市大明見
■所有者：個人

目通り幹囲2.11m、樹高10mで、この木の幹は地上約2.5mより3幹に分岐する。庭木であるため大枝等を切断してあるが、小枝が多数萌芽して樹勢は旺盛。目通り幹囲が2mを越える株は全国的にも少ない。